

最終号を迎えるにあたって

—総合文化研究所の成果、そして未来へ—

学長 河見 誠

青山学院女子短期大学の閉学決定に伴い、総合文化研究所は2021年3月をもって閉所となり、年報も本号が最終号となる。

本研究所は1991年4月開所以来、30年にわたり51のプロジェクトを立てて共同研究を続けてきた。扱われてきた内容は、アジア、アメリカ、生活、文化、社会、教育、比較等々幅広い領域にわたりバラエティに富んでいるが、その中でも複数回継続的に扱われてきたテーマはキリスト教、女子教育、家族である。キリスト教・宗教をタイトルに含むプロジェクトは9、女性・女子をタイトルに含むのは12（そのうち前者と重複するものが2つ）、家族をタイトルに含むのは6となる。女子大学として、フェミニズム、ジェンダー論の観点を持ちつつ学際的研究に取り組んできたこと、女性の生き方と社会的位置づけを考えるための重要な軸となる家族について総合的探究を続けてきたこと、そして本学の基盤であるキリスト教について文化、芸術、教育等を切り口とした研究を常に展開してきたこと。これが本研究所の特徴であったとすることができよう。

そして共同研究を教育につなげていく姿勢もまた大きな特徴であった。プロジェクトで教育をタイトルに含むものは（青山学院女子短期大学、女子大学寮、保育を含めると）15に及ぶ。実際にプロジェクトが授業に結実していったものもある。研究所規則第1条で本研究所の目的は、「教育研究との有機的な関係の下に、広く学術を総合した研究及び各専門領域の研究を行うこと」とされている。教育と研究が常に結びついたものでなければならぬという本学のスタンスが、本研究所においてもしっかり貫かれてきたことが分かる。本学はキリスト教教育、女子教育、教養教育を旨としてきたが、それがキリスト教に基づいた女子教育（エンパワーメント）のための教養教育であることが、51の研究プロジェクトの構成と内容からも窺われよう。

このようなキリスト教に基づいた女子教育と有機的に結びついた研究を、未来に継承させていく準備として、本学は2020年4月、本研究所内にジェンダー研究所を立ち上げた。そこで立てられた柱は、研究事業（ジェンダー研究、青山学院の女子教育の検証研究）、教育事業（ジェンダーをテーマとした授業の開発、教員間の連携づくり、FD・SD、ジェンダーを学ぶ学生への奨学金など）、そして社会貢献事業（男女共生社会に向けた講座・ワークショップ、女子短期大学同窓生をはじめとする青山学院校友と相携えての生涯教育、ギャラリー事業による社会的発信など）の三つである。「教育と研究の有機的関係」すなわち研究を教育へとさらに組織的に展開することに加え、未来に向けて社会貢献（ジェンダーの観点からの公正社会、共生社会実現）を目指すこととしたのである。

ジェンダー研究所で準備された、本研究所の成果の未来に向けたさらなる発展的展開は、2021年4月開設された「青山学院大学附置スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター」に受け継がれることとなった。センター規則は、その目的を次のように規定している。

第2条 センターは、青山学院大学が、青山学院女子短期大学において行われていたジェンダー研究を受け継ぎ、青山学院における女子教育の伝統を新しい時代に継承するとともに、キリスト教精神に基づいた、本学におけるジェンダー研究の遂行及びジェンダー教育の発展を通じて、青山学院及び社会におけるジェンダー平等及び性の多様性の尊重に貢献することを目的とする。

青山学院の最初の源流である女子小学校創設において、スクーンメーカーはキリスト教に基づく女子のエンパワーメント教育をはじめたと言える。その姿勢は、救世学校、海岸女学校、東京英和女学校、青山女学院、そして青山学院女子短期大学に受け継がれてきた。本学は閉学に当たり、その歴史を継承し、未来に向けて女性、性的マイノリティ、そしてジェンダーの観点からすべての人のエンパワーメントのための研究、教育、社会貢献を展開していくことを、スクーンメーカーの名を冠するこのセンター及び青山学院全体に託することになる。そして、先がますます見通しにくくなっている21世紀の時代状況のなかで教育と研究と社会貢献の有機的關係を模索している皆様へ、147年にわたり「地の塩、世の光」たらんと格闘してきた青山学院の女子教育からのバトンとして、この年報最終号をお渡しすることができれば幸いである。